

学習指導要領の改訂に伴う学校英語教科書語彙の時代的变化 1980年代から現在まで

長谷川修治
千葉県立長狭高等学校
中條清美
日本大学

Vocabulary Size and Efficacy within Three Serial JSH English Textbook Vocabularies Created in Accordance with Revised “*Course of Study*” Guidelines

HASEGAWA, Shuji
Chiba Prefectural Nagasa High School
CHUJO, Kiyomi
Nihon University

Junior and senior high school (JSH) English textbooks in Japan are written in accordance with the Course of Study guidelines provided by the Ministry of Education, Science, and Culture: these guidelines are revised about every ten years. In this study, we examined the vocabulary of three sets of serial JSH textbooks, each of which was written in the 1980s, and then re-written in the 90s and again in the 2000s based on the revised Course of Study guidelines for each decade.

The purpose of this study was to investigate both the alteration in vocabulary size and the efficacy of the three serial JSH textbook vocabularies. The study found that the number of types within JSH textbook vocabulary in the 2000s was larger than that of the 1980s and 90s. On the other hand, the amount of tokens in the 2000 set was the lowest of the three serials. This means that the number of repetitions of exposure to words used in the 2000s version textbook was the lowest of the three. The study also found that the efficacy of the JSH textbook vocabulary gradually improved each time A Course of Study was revised, although the overall JSH text coverage over the vocabulary of practical activities remained insufficient.

1. はじめに

英語教育において学習指導要領が改訂されるたびにまず話題となることは、中学校・高等学校で学習される語数である。この背景には英語の言語活動における語彙の果たす重要性がある (e.g. Coady & Huckin, 1997; Shumitt & McCarthy 1997; Read, 2000; Schumitt, 2000; Nation, 2001)。特に、読解力は語彙力との相関が高く、テキストをなんとか理解するためには、その総語数に対する既知語の割合(カバー率)が95%以上必要であると言われる(cf. Laufer, 1997, p.24; 投野, 1997, p.115; Nation, 2001, p.233)。これは、未知語に遭遇する割合が20語に1語であることを意味し、羽鳥(1979, p.110)の推定と一致する。

とかく「役に立たない」と批判されることの多い学校英語に関し、中学校・高等学校の6年間を通じて、学校の英語教科書を学習した場合、語彙の面でどの程度の実用性が得られるかは興味のあるところである。このことについて、中條・長谷川・竹蓋(1993)では「文字言語活動」と「音声言語活動」に占める教科書語彙の割合を調査分析し、「日常生活用語」の不足を指摘している。また、長谷川(2003)は、過去10年間にわたり「センター試験」と「英検2級」に対する教科書語彙のカバー率を調査し、学校英語でカバー率95%を達成するのは困難であると報告している。

昨今、大学生の学力低下が問題となっているが、大学入試センターが1998年末に国立大学の学部長に対して行なった調査では、84%が大学教育を実施する上で支障があると回答している¹。また、大阪教育大学が1999年に全学の教員に対して行なった調査によれば、大学生の学力低下が目立つようになったのは、1990年以降とした者が26%、1997年以降とした者が24%であった²。しかし、これらの調査からは英語力の低下についての詳細はわからない。そこで本研究では、学習者が直接使用する中・高の英語教科書の語彙が、1980年代以降、学習指導要領の改訂に伴いどのような変化を遂げているかを、定性的・定量的観点から調査することにより、この問題の一端を探ろうと考えた。

2. 学習指導要領に指定された語数

法的拘束力のある学習指導要領が初めて出されたのは1958年であり、その後、約10年ごとに改訂されている。その当初から現在までの指定語数の変遷を調査したものには、望月(2001)と村田(2002)が挙げられる。しかし、中学校と高等学校の6年間で学習する語の累計が、両者では算出法が異なる年もあるため、本研究では1980年代以降を独自に調査した³。調査年代は、学習指導要領の施行年度が大きく3区分できることから、「1980年代」(中学1981年、高校1982年施行)、「1990年代」(中学1991年、高校1994年施行)、「2000年代」(中学2002年、高校2003年施行)とし、以下この呼称を用いることにする。調査結果は、中学校を表1、高等学校を表2、「中学校+高等学校」を表3に示した。

表1 学習指導要領に基づく中学校英語教科書で学習する語数

学年	1980年代 (1977年告示, 1981年施行)		1990年代 (1989年告示, 1991年施行)		2000年代 (1998年告示, 2002年施行)	
	標準 単位数	語数	標準 単位数	語数	標準 単位数	語数
1 学年	3	300 ~ 350 語	3 ~ 4	1000語から適 当な語数	3	900語から適 当な語数
2 学年	3	300 ~ 350 語	3 ~ 4		3	
3 学年	3	300 ~ 350 語	3 ~ 4		3	
合計		900 ~ 1050 語		1000 語		900 語

注：各学年で学習される語には、次の必修語が含まれる。
1980年代：490語，1990年代：507語，2000年代：100語

表2 学習指導要領に基づく高等学校英語教科書で学習する語数

1980年代 (1978年告示, 1982年施行)			1990年代 (1989年告示, 1994年施行)			2000年代 (1999年告示, 2003年施行)		
科目	標準 単位数	語数	科目	標準 単位数	語数	科目	標準 単位数	語数
英語	4	中学+400 ~ 500語	英語	4	中学+500語	英語	3	中学+400語
英語	5	英語 +600 ~ 700語	英語	4	英語 + 500語	英語	4	英語 +500語
英語 A	3	中学+英語 +英語	OCA	2	英語 の範囲	OC	2	英語 の範囲
			OCB	2	英語 の範囲	OC	4	英語 の範囲
			OCC	2	英語 の範囲			
英語 B	3	中学+英語 +英語 +400 ~ 700語	Reading	4	英語 +900語	Reading	4	英語 +900語
英語 C	3	中学+英語 +英語	Writing	4	英語 の範囲	Writing	4	英語 の範囲
合計		中学+1400 ~ 1900語	合計		中学+1900語	合計		中学+1800語

注：OC = オーラル・コミュニケーション

表3 学習指導要領に基づく「中学校+高等学校」の英語教科書で学習する語数

	1980年代	1990年代	2000年代
累計語数	2300 ~ 2950語	2900語	2700語

集計結果のうち表3の「中学校+高等学校」の累計語数を見ると、やはり近年の大学新入生は英語の語彙力が低下しているのではないかと推定できる。特に、2000年代の学習指導要領では、「中学校+高等学校」で学習できる語数が1990年代と比較して200語減少している。ただし、学習指導要領に示された語数の累計は、あくまでも枠組みとなる参考語数

である。また、語数の多寡を議論する量的な問題とともに、語の種類や内容についての質的な問題も議論されなければならない(杉浦, 2002)。特に、「役に立たない」と批判されることの多い学校英語の実用性を、語彙の面から実際に調査する必要がある。

3 . 研究の目的

本研究では、学習指導要領に基づく英語教科書を使用して、中学校と高等学校で合計6年間の英語を学習をした場合、大学入学までに到達できる英語の語彙数とその実用性はどの程度であるか、1980年代、1990年代、2000年代に使用された学校英語教科書の語彙を定性・定量的に比較調査する。

4 . 研究の方法

4.1 言語材料

4.1.1 学校英語教科書

調査対象とする学校英語教科書は、中学校・高等学校ともに1980年代から2000年代まで採択数上位にあった教科書シリーズより選定した(cf.『内外教育』,『教科書レポート』)。高等学校用は、大学進学者の多い普通高校で一般に使用されると考えられる「英語」「英語」「リーディング(1980年代は英語 B)」とした。本研究で調査した教科書の詳細は次のとおりである。

中学校 *New Horizon 1, 2, 3* (1988, 2000, 2002) (東京書籍)

高等学校 *Unicorn* (1987, 1997, 2003), (1988, 1998, 2003),
Reading (1999, 2003) [*B* (1988)] (文英堂)

そして、ひとりの生徒が中学校では *New Horizon 1*、2、3、高等学校では *Unicorn*、*Reading* (1980年代は英語 B) を使用して学習したものと仮定して以下の調査を進めた。

4.1.2 実用性の計測に使用した言語材料

日本人英語学習者が高校卒業後に大学生となり、グローバル化社会の中で生きるために必要とされる英語という観点から、音声英語と文字英語について次の5つのジャンルを設定し、下位区分として音声英語・文字英語各7分野から言語材料を収集した(表4)⁴。5つのジャンルとは、(1) 英語コミュニケーション能力試験 (TOEIC, TOEFL) (2) 大学留学 (チュートリアル、大学入学案内) (3) 情報収集 (英語ニュース、英字新聞・英文雑誌) (4) 日常生活 (生活英語、生活案内) (5) 趣味・教養 (映画、小説) である。(1)については、国際ビジネスマンとしての基本的英語コミュニケーション能力を測るTOEICと、英語圏の大学・大学院留学に必要な英語コミュニケーション能力を測るTOEFL、という2分野の言語材料を用意した。同様に(3)についても、日本人英語学習者が到達目標にすると考えられ

るもの (PBS, *TIME*) と、初心者向けの教育的配慮のあるもの (VOA, *News for You*) という観点から 2 分野ずつとした。したがって、音声英語と文字英語で各 5 ジャンル 7 分野の言語材料を選定した。(3)情報収集と(4)日常生活の分野の選定にあたっては中條他 (1993), 中條・長谷川 (2003a) を参考にした。

表 4 実用性の計測に使用した言語材料

	音声英語	文字英語
英語コミュニケーション能力試験	TOEIC (リスニング・セクション) TOEFL (リスニング・セクション)	TOEIC (リーディング・セクション) TOEFL (リーディング・セクション)
大学留学	チュートリアル	大学入学案内
情報収集	PBS (TVニュース) VOA (ラジオ・レポート)	<i>TIME</i> (英文雑誌) <i>News for You</i> (ESL英字新聞)
日常生活	サバイバル英語 (生活英語)	生活案内
教養	映画 (Titanic)	小説 (<i>Harry Potter</i>)

4.2 調査・分析の方法

教科書語彙の「語彙数」と「実用性」を調査する方法を以下に述べる。

4.2.1 教科書語彙リストの作成と語数の計測

中学校教科書、および、高等学校教科書の英文を各 3 冊ずつ 1980 年代、1990 年代、2000 年代という年代ごとに入力した。入力部分は「各課の本文」と「Supplementary Reading」とし、電子化されていないものはスキャナーを使用して入力、校正した。次に、TreeTagger プログラム⁵を使用して基本形の語彙リストを作成し、年代別、中学・高校別に、延べ語数、異語数、反復回数 (延べ語数 / 異語数) を調査した。

4.2.2 実用性の計測

音声英語と文字英語の各 7 分野の言語材料に対して、教科書語彙の占める割合であるカバー率を計算して実用性を推定した手順を以下に述べる。

信頼性のある計測結果を得るため、竹蓋・中條 (1993) を参考にし、分野ごとに 1,500 語のサンプルを 5 個無作為に抽出した。次に、TreeTagger プログラムを使用して、単語の変化形を基本形に集約した語彙リストをサンプルごとに作成し、特定のテキストに集中して出現することが多い固有名詞・数詞を除去した。その上で、各サンプルの語彙リストに占める上記 4.2.1 で作成した各教科書語彙のカバー率を計算し、分野ごとの平均値を比較した。

なお、言語材料のうち、英語コミュニケーション能力試験の TOEIC と TOEFL は試験問題という性格上、テスト全体を対象とし、テスト問題各 2 回のカバー率の平均値を使用した。それぞれのリスニング・セクションとリーディング・セクションの延べ語数は各々 3,000 語以上あることから、サンプル 2 個の平均でも安定した結果を得られると判断した(中條・内山, 2003b)。

5 . 結果と考察

5.1 学校英語教科書語彙の定量的変化

5.1.1 新教育課程 (2000 年代) の中学校英語教科書

2000 年代の中学校の教科書語彙を検討する際に考慮すべきことを述べる。2000 年代の中学校英語教科書 (*New Horizon*) は各課の構成が細分化されており、各課はその中心となる「本文」と「Listening Plus」「Reading Plus」「Writing Plus」「Multi Plus」という学習材料の組み合わせで構成されている。当初、調査対象は「各課の本文」と「Supplementary Reading」としたことから、これらの「Plus」の言語材料をどう扱うのが妥当であるか判断がつかねた。そこで、まず、各課の本文のみを入力したところ、表 5 に示したように異語数が 662 語となり、学習指導要領で指定された語数 900 語には及ばないことが判明した。次に、「Plus」の部分を含めて入力した結果、異語数は 1,001 語となった。

表 5 中学校英語教科書 (2000 年代) の語彙数

	本文のみ		本文 + Plus	
	異語数	延べ語数	異語数	延べ語数
中学1年～3年教科書合計	662	3,403	1,001	7,128

この「Plus」の部分は、担当教師の自由裁量によって指導するかどうかを選択できる形式になっている。しかし、上で見たように、この「Plus」の部分を指導対象にしなかった場合は、大幅な語数の減少となることを認識しておく必要がある。

5.1.2 中学・高等学校英語教科書の語彙数 (異語数)

上記のような事実があるということを確認した上で、2000 年代の中学校教科書では、「Plus」の部分も全て学習した場合を想定して比較調査を行なうことにした。学校英語教科書で扱われる語数の変化を 1980 年代、1990 年代、2000 年代ごとに調査した結果を表 6 に示した。

表 6 中学・高等学校英語教科書の語彙数の変遷

学校英語教科書	1980年代		1990年代		2000年代	
	異語数	延べ語数	異語数	延べ語数	異語数	延べ語数
中学校英語教科書 <i>New Horizon 1</i>	289	1,562	383	1,671	433	1,586
中学校英語教科書 <i>New Horizon 2</i>	571	2,966	680	3,700	573	2,806
中学校英語教科書 <i>New Horizon 3</i>	670	3,763	730	4,069	573	2,736
中学校教科書合計	989	8,291	1,124	9,440	1,001	7,128
高等学校英語教科書 <i>Unicorn</i>	1,450	12,113	1,543	10,518	1,196	6,789
高等学校英語教科書 <i>Unicorn</i>	2,059	18,497	1,765	11,568	1,739	11,012
高等学校英語教科書 <i>Unicorn Reading</i>	2,133	20,938	2,272	14,592	2,783	16,183
高等学校教科書合計	3,285	51,548	3,478	36,678	3,718	33,984
中学1年～高校3年累計	3,486	59,839	3,747	46,118	3,950	41,112

表 6 において、「中学校教科書合計」の欄を 1980 年代から 2000 年代へと異語数を観察すると、989 語 1,124 語 1,001 語となり、「Plus」を全て加えた場合でも、2000 年代（新教育課程）は 1990 年代より減少している。逆に、「高等学校教科書合計」は、3,285 語 3,478 語 3,718 語となり、年代の変遷とともに語数が増加している。このため、「中学 1 年～高校 3 年累計」は 3,486 語 3,747 語 3,950 語となり、現在に近づくと語数の増加が認められる。したがって、学習指導要領で示された英語の指定語数が 1980 年代から 2000 年代にかけて減少しているのに反比例し、本稿で検討した教科書については、中・高 6 年間で総合すると、学校英語教科書の異語数は増加していることが判明した。

高校英語教科書の異語数を詳細に観察してみると、2000 年代で標準単位が 1 単位減少して 3 単位になった「英語」では、異語数の時代的变化が 1,450 語 1,543 語 1,196 語であることから、やはり 2000 年代での語数の減少が確認できる。1980 年代以降、「英語」の単位数は 4 単位で変化はないが、異語数は時代の変遷とともに 2,059 語 1,765 語 1,739 語となっており多少減少している。ところが、「Reading」の場合は単位数は 1980 年代から 4 単位のままでありながら、異語数は 2,133 語 2,272 語 2,783 語と増加傾向にある。特に、2000 年代の増加が大きい理由としては、Lesson 数を 12（1990 年代）から 15（2000 年代）に増やしたことが考えられる。いずれにせよ、「Reading」の異語数増は「中学 1 年～高校 3 年累計」の異語数の増加に影響を与えていることがわかる。

5.1.3 中学・高等学校英語教科書の語彙数（延べ語数と反復回数）

上記の表 6 において教科書で扱われる延べ語数を観察すると、「中学校教科書合計」では 8,291 語 9,440 語 7,128 語と 2000 年代で減少している。「高等学校教科書合計」も、51,548 語 36,678 語 33,984 語と 1980 年代から大幅に減少している。そこで、1 語あたりの反復

回数（延べ語数 / 異語数）を「中学校教科書合計」「高等学校教科書合計」ごとに計算し、表7に示した。

表7 1語あたりの反復回数

	1980年代	1990年代	2000年代
中学校教科書合計	8.4	8.4	7.1
高等学校教科書合計	15.7	10.5	9.1

表7から明らかなように、中学、高校ともに、時代を追うごとに1語あたりの反復回数が減少していることが認められる。特に高校の場合、1980年代の15.7回から2000年代の9.1回まで42%の減少である。語彙の学習における繰り返しの重要性 (O'Dell, 1997, p.276: Nation, 2001, pp.74-81: 林, 2002, p.55) を考慮すると、2000年代の英語教科書ではその定着度が憂慮される。高校の場合、異語数が増加しているために問題はさらに深刻である。

5.2 学校英語教科書語彙のカバー率の変化

5.2.1 7分野の平均から見た比較

1980年代から2000年代（新教育課程）までの教科書語彙の変化が実用性にどのような影響を与えているかを、音声英語と文字英語の各5ジャンル7分野について調査した結果を表8に示した。表の作成にあたっては、中学校は3年間をひとまとめにし、次に、高1まで、高2まで、高3までという具合に、学年進行とともに、その累計語数でカバー率の変化がわかるようにした。高等学校で使用される教科書は、高1は「英語」、高2は「英語」、高3は「Reading (1980年代は英語B)」を学習した場合を想定した。音声英語、文字英語ごとに、表の上段の数字は7分野の平均カバー率、下段は上段に示したカバー率では何語に1語の割合（「1/語」と表記）で未知語に遭遇するかを示した。

表8 学年別累計カバー率の変遷

	中学			高1			高2			高3		
	1980	1990	2000	1980	1990	2000	1980	1990	2000	1980	1990	2000
音声英語	80.9	81.9	80.0	85.8	86.9	85.2	89.4	90.2	89.3	91.4	92.4	92.8
	1/5.2	1/5.5	1/5.0	1/7.0	1/7.6	1/6.8	1/9.4	1/10.2	1/9.3	1/11.6	1/13.2	1/13.9
文字英語	67.9	69.9	67.7	74.9	77.1	74.6	80.7	81.3	80.8	83.2	85.3	86.0
	1/3.1	1/3.3	1/3.1	1/4.0	1/4.4	1/3.9	1/5.2	1/5.3	1/5.2	1/6.0	1/6.8	1/7.1

上段：カバー率（%） 下段：未知語に遭遇する割合

表 8 に示した学年別の累計カバー率の変遷を、以下で学年ごとに考察する。

まず、新教育課程において指定語数が 100 語減少したということで現在関心が寄せられている「中学」の部分を見ると、2000 年代では 100 語削減の影響を受けて音声英語と文字英語ともにカバー率が低下している。

次に、「英語」の単位数が 1 単位削減され教科書の厚みも薄くなった新教育課程（2000 年代）の「高 1」では、中学校の語数削減も重なって危惧されたとおり、中学校 3 年分に高校 1 年を加えた教科書語彙のカバー率は音声英語と文字英語でともに低くなっている。

「高 2」では、文字英語において、2000 年代は 1980 年代より 0.1 ポイント高いものの、未知語に遭遇する割合はほぼ同じであり、1990 年代と比べると低調なカバー率に留まっている。しかしながら、「高 3」では、形勢は逆転して音声英語・文字英語ともに 2000 年代（新教育課程）が他の年代をしのぎ最上位となる。つまり、中・高 6 年間で 2000 年代（新教育課程）の教科書を使用した場合には、1980 年代や 1990 年代の教科書より高い実用性が期待できることを示している。また、その原動力になっているのは、3 年代の中では最も異語数の多い 2000 年代の「Reading」の教科書語彙に関連していることが明らかである。

以上、学年別累計カバー率の変化を 3 時代で比較した。全体としてみると、高校 3 年生までの教科書語彙を完璧に学習したとしても、どの年代をとっても、音声英語・文字英語ともに、識者が内容理解に最低限必要であると指摘する 95% のカバー率には達していない。したがって、学校英語に対する実用性についての批判はあながち否定できないものと考えられる。

5.2.2 7 分野間の比較

実用性の指標とした 7 分野に対する中・高 6 年間で学習できる教科書語彙のカバー率（単位：％）を、1980 年代、1990 年代、2000 年代の 3 年代について調査した結果をレーダーチャートにして図 1 と図 2 に示した。図 1 が音声英語、図 2 が文字英語である。

レーダーチャートの形状を比較した場合、音声英語が全体的に大きく円に近いのに対し、文字英語では全体が小さく、しかも分野によって偏りが見られる。これは、本研究で調査した音声英語の 7 分野に対しては、教科書語彙のカバー率は比較的高く、文字英語の 7 分野ではカバー率が低いということを意味している。

しかしながら、音声英語は、一見したところカバー率が高く 7 分野に対してバランスよく対応しているかのように見えるが、カバー率が 95% 以上に達しているのは「サバイバル英語」のみである。他の分野ではどれも 90% 程度に留まっている。

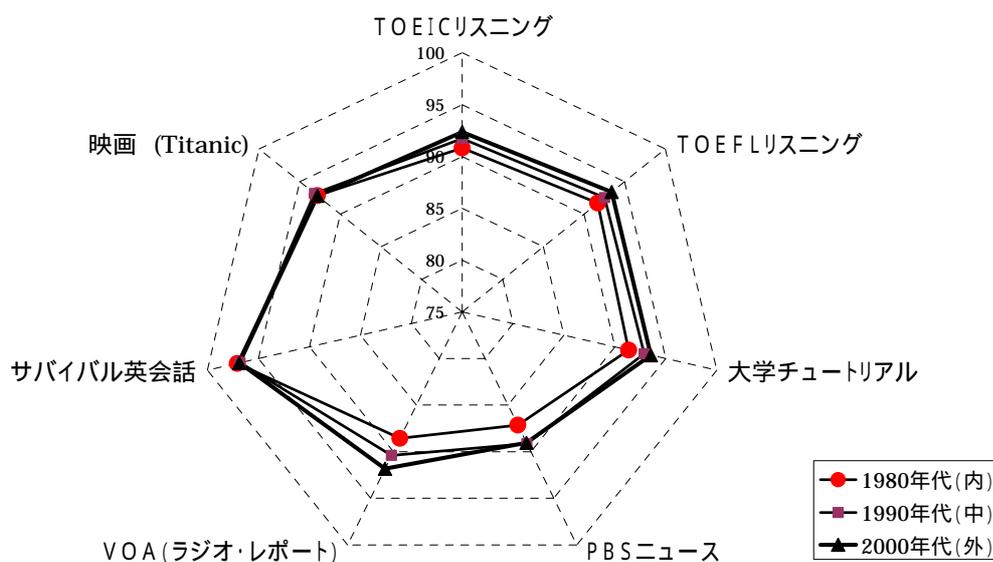


図1 年代別に見た分野別カバー率の変遷（音声英語）

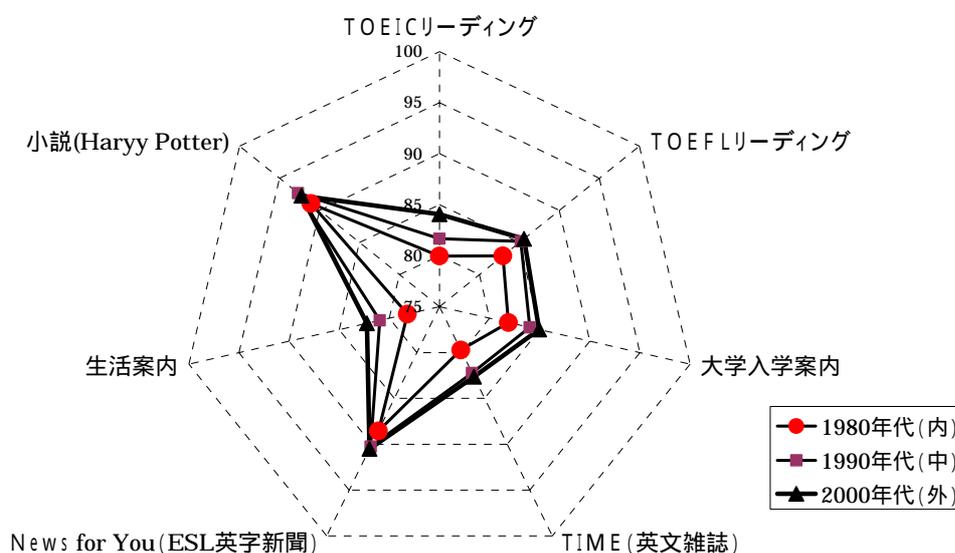


図2 年代別に見た分野別カバー率の変遷（文字英語）

一方、文字英語においては、小説(Harry Potter)とESL (English as a Second Language) 用の英字新聞である *News for You* の相対的なカバー率の高さが目につく。「小説」のカバー率が高かったのは、高校教科書「Reading」の語彙が中学・高校教科書語彙の中で大きな部分を占めるため、読み物である小説のカバー率に影響を与えたのではないかと推測できる。ち

なみに、2000年代の教科書語彙の小説に対するカバー率は92.3%であり、大学英語教育でもう少し語彙を補えば *Harry Potter* が英語で読める可能性が見えたことは、学習者だけでなく教師にも励みになる。また、*News for You* は中條他(2003a)により中学・高校教科書語彙の語彙レベルに最も近い教材として時事英語の入門に最適であると報告されているが、本研究の結果からも同様のことが言える。しかし、海外で生活を開始する場合に、住人として必須の情報である居住地の「生活案内」のカバー率が低いということは、中條他(1993)の指摘にもあるように、2000年代においても日常生活用語の不足が日本の英語教科書語彙の弱点になっていると考えられる。

次に、1980年代、1990年代、2000年代の教科書語彙のカバー率を、年代ごとの相対的变化に注目して図1と図2を観察した。両図を詳細に見ると、大多数の分野において1980年代 1990年代 2000年代の順序でチャートが外側に広がっており、新教育課程(2000年代)は、7分野のうち音声英語で5分野、文字英語で6分野におけるカバー率が最も高い。一方、1980年代と2000年代を比較した場合、音声英語では「VOA」が3.2ポイント、文字英語では「TOEICリーディング」が4.1ポイント、「生活案内」が4.0ポイントのカバー率が上昇し、改善幅が大きいことが判明した。このことから、中学校では2002年度、高等学校では2003年度から実施されている新教育課程の教科書語彙は、カバー率は十分とは言えないまでも、時代の流れとともに世の中が必要とする分野の語彙を盛り込むことに努めていることがうかがえる。特に、10年前から語数の少なさが指摘されてきた「生活英語」と、近年受験者数の増加している「TOEIC」の分野でカバー率が上昇していることは、望ましい結果と言える。

上記で新教育課程(2000年代)の教科書語彙が改善されていることを見たが、それでも依然として現況の教科書語彙のカバー率は低く、たとえばTOEICやTOEFLのリーディング・セクションのカバー率はそれぞれ84.1%、85.6%となっている。これはリーディング問題の英文の6~7語に1語は未知語であることを意味し、実用レベルに達していない。したがって、中・高英語教科書語彙の現実に対応し、社会の要請する実用性に応えるには、大学英語教育の段階で引き続き効率よく語彙力養成の方策を講じる必要がある。その際には、中條(2003)やChujo & Nishigaki(2003)で選定したような公開語彙リストの利用も考えられる⁶。

6. まとめ

本研究の目的は、学習指導要領に基づく英語教科書を使用して中・高6年間の英語学習を行なった場合、大学入学までに到達できる英語の語彙数とその実用性はどの程度であるか、1980年代、1990年代、2000年代で、その変化を定性・定量的に比較調査することであった。教科書英語の時代的変遷を、「語彙数」と「実用性」という2つの視点から調査した結果、次のことが明らかとなった。

1. 本調査で検討した中学校の英語教科書の場合、担当教師の自由裁量にまかされているセクションが多いが、それらを積極的に扱わないと語彙力の低下を招く恐れがある。
2. 中学1年～高校3年までの英語教科書の語彙を累計して「異語数」を見る限り、新教育課程では学習指導要領の指定語数削減から予想されるような語数の減少はない。
3. しかしながら、中学1年～高校3年までの英語教科書の語彙を累計して「延べ語数」を見ると、新教育課程は英語教科書の延べ語数が減少したため、1語あたりの反復回数が少なく、語彙の定着率の低下が懸念される。
4. 語彙のカバー率から見た学校英語の実用性は「サバイバル英語」に十分であるが、英語コミュニケーション能力試験、大学留学、情報収集（英語ニュース・英字新聞等）、日常生活、趣味・教養（映画・小説）においては不十分である。
5. 中学校・高等学校における英語教育の目標は基礎・基本にあると考えた場合、教科書語彙は実用性の点では不十分ながらも、時代の推移とともに社会の要請する方向に向かっている。
6. ただし、新教育課程では、高校の「Reading」で扱われる異語数が「英語」「英語」と比較して相対的に多くなっており、実用性の向上にかなり寄与している。このことから、「Reading」で学習される語彙も定着率の高い方法で指導されなければならない。

実用性を高めるために語数を増やし、あらゆることを教科書に盛り込もうといっても限度があると考えられる。しかし新教育課程においては、学習指導要領上の単位数と語数の削減がありながらも、今回調査した教科書については、語数は大幅には減少しておらず、実用性についても配慮が見られた。したがって、語彙に関してこれらの教科書を有効に活用するためには、授業の実施時数を十分確保し、語彙の定着を高めるための工夫を講ずることが重要であると言える。

謝辞 本稿をまとめるにあたり、千葉大学教育学部の西垣知佳子氏に貴重なご意見を頂きました。ここに感謝いたします。

(注)

¹ 次のURL参照：<http://www.daiichisemi.net/revision/ro2.jsp>

² 次のURL参照：<http://okumedia.cc.osaka-kyoiku.ac.jp/~kyoyo/oshirase/result.html>

³ たとえば、1990年代の中・高累計語数が、望月では「2,900語」であるのに対して、村田では「2,400+」となっている。独自の調査では、吉富他(1977)、小川他(1982)、文部省(1989a, 1989b, 1998, 1999)を参照した。

4 出典は次のとおり：

- (1) 英語コミュニケーション能力試験
TOEICリスニング・セクション, TOEICリーディング・セクション
TOEIC公式ガイド&問題集 Vol.1 (2000), 2 (2002) 練習テスト
TOEFLリスニング・セクション, TOEFLリーディング・セクション
TOEFL Practice Tests Vol.2 (1999), Practice Tests A, B
 - (2) 大学留学
大学チュートリアル (British National Corpus)
1st-year undergraduate tutorial: linguistics (G4W), Economics tutorial (HYL)
大学入学案内
International Programs and Services (<http://www.columbia.edu/cu/isso/>)
 - (3) 情報収集
PBS (TVニュース)
Inspecting Iraq 他5編 (2002, http://www.pbs.org/newshour/newshour_index.html)
TIME (英文雑誌)
A Bad Menu for Peace他 16 編 (2002, <http://www.time.com/time>)
VOA (ラジオ・レポート)
FAO Water Report他19編 (<http://www.eigozai.com/USA/USA.htm>)
News for You (ESL英字新聞)
Enron Under Investigation等5週分 (2002)
 - (4) 日常生活
サバイバル英語 (生活英語)
eigozai ENGLISH USA (<http://www.eigozai.com/USA/USA.htm>)
生活案内
Official web site of the City of White Plains (<http://www.cityofwhiteplains.com/>)
 - (5) 趣味・教養
映画
Titanic (<http://www.pumpkinsoft.de/screenplay451/>)
小説
Harry Potter and the Philosopher's Stone, 1 ~ 5章 J.K. Rowling (1997)
- 5 <http://www.ims.uni-stuttgart.de/projekte/corplex/TreeTagger/index.html>
- 6 <http://www5d.biglobe.ne.jp/~chujo/>

参考文献

- Chujo, K. & Nishigaki C. (2003). Bridging the Vocabulary Gap: from EGP to EAP. *JACET Bulletin*, 37. 73-84.
- 中條清美.(2003).「英語初級者向け『TOEIC 語彙 1, 2』の選定とその効果」.『日本大学生産工学部研究報告』36. 27-42.
- 中條清美, 長谷川修治, 竹蓋幸生.(1993).「日米英語教科書の比較研究から」.『現代英語教育』第29巻 第12号. 14-16.
- 中條清美, 長谷川修治.(2003a).「時事英語の授業で用いられる英文素材の語彙レベル調査 BNC (British National Corpus) を基準にして」.『時事英語学研究』No.XLII. 51-62.
- 中條清美, 内山将夫.(2003b).「英文素材の語彙レベル計測に関する基礎的研究」.第36回日本大学生産工学部学術講演会教養・基礎科学部会講演概要. 7-8.

- Coady, J and Huckin, T. (Eds.). (1997). *Second Language Acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cambridge University Press.
- 長谷川修治 . (2003). 「英検 2 級とセンター試験に対する英語教科書語彙の効果
過去 10 年間の通時的調査」. 『Step Bulletin』第 15 号 .日本英語検定協会 .152-158 .
- 羽鳥博愛他 . (1979). 『英語指導法ハンドブック 4 <評価編>』. 東京：大修館書店 .
- 林洋和 . (2002). 『英語の語彙指導 理論と実践の統合をめざして』. 広島：溪水社 .
- 出版労連 . (1987). 『教科書レポート』. No.31 . 出版労連 .
- 出版労連 . (2002). 『教科書レポート』. No.46 . 出版労連 .
- Laufer, B. (1997). The lexical plight in second language reading: Words you don't know, words you think you know, and words you can't guess. In Coady and Huckin (Eds.). 20-34.
- 望月昭彦 (編) . (2001). 『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』. 東京：大修館書店 .
- 文部省 . (1989a) . 『中学校学習指導要領』. 東京：大蔵省印刷局 .
- 文部省 . (1989b) . 『高等学校学習指導要領解説 外国語 英語編』. 東京：教育出版 .
- 文部省 . (1998) . 『中学校学習指導要領』. 東京：大蔵省印刷局 .
- 文部省 . (1999) . 『高等学校学習指導要領』. 東京：大蔵省印刷局 .
- 村田年 . (2002) . 「新指導要領の語彙制限がもたらすもの」. 『英語教育』第 50 巻 第 12 号 . 20-22 .
- 時事通信社 . 『内外教育』. (12/18,1987; 12/10,1993; 1/10,1995; 1/26,1996; 1/14,1997; 1/16,1998; 1/26,1999; 1/14,2000; 1/16,2001; 1/30,2001; 1/11,2002; 12/3,2002) . 時事通信社 .
- Nation. I. S. P. (2001). *Learning Vocabulary in Another Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- O'Dell, F. (1997). Incorporating vocabulary into the syllabus. In Shumitt and McCarthy (Eds.). 258-278.
- 小川芳男 他 (編) . (1982) . 『英語教授法辞典 新版』. 東京：三省堂 .
- Read, J. (2000). *Assessing vocabulary*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schumitt, N. (2000). *Vocabulary in Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Shumitt, N. and McCarthy, M. (Eds.). (1997). *Vocabulary: Description, Acquisition and Pedagogy*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 齊藤俊雄, 中村純作, 赤野一郎 (編) . (1998) . 『英語コーパス言語学：基礎と実践』. 東京：研究社出版 .
- 杉浦千早 . (2002) . 「高校英語教科書語彙リストの作成と使用語彙の検討」. *Language Education & Technology* 第 39 号 . 117-136 .
- 竹蓋幸生 . (1982) . 『日本人英語の科学』. 東京：研究社出版 .
- 竹蓋幸生, 中條清美 . (1993) . 「有効度指標の安定性について」. 『言語行動の研究』第 3 号, 千葉大学英語学・言語行動研究会 . 85-115 .

投野由紀夫（編著）. (1997). 『英語語彙習得論：ボキャブラリー学習を科学する』. 東京：
河源社 .

吉富一，佐々木輝夫（編）. (1977). 『改訂 中学校学習指導要領の展開 外国語（英語）科
編』. 東京：明治図書 .